

聖書日課 『からし種』 2021.2.14-2.21

<p>2月14日 (日) コヘレト 5章</p>	<p>「焦って口を開き、心せいで／神の前に言葉を出そうとするな。神は天にいまし、あなたは地上にいる。言葉数を少なくせよ」(1節)。お祈りという「何か言葉にしなれば…」と心せいでしまうけれど、無理に言葉にしなくてもいい。天におられ、すべてをご存知の神さまの前に座り、「あなたの言葉を聴かせてください」と祈り願う。その静かな時を大切にしたい。</p>
<p>15日 (月) コヘレト 6章</p>	<p>「短く空しい人生の日々を、影のように過ごす人間にとって、幸福とは何かを誰が知ろう」(12節)。「幸福とは何か?」。コヘレトは言う。「どんな金持ちも知者も、自分の手の中に幸福を握りしめることはできない」と。私たちは自分の手の中に神を保持することはできない。が、イエス・キリストがどんな時も私たちをその御手の中に捕えていてくださることを覚えたい。</p>
<p>16日 (火) コヘレト 7章</p>	<p>「弔いの家に行くのは／酒宴の家に行くのにまさる。そこには人皆の終わりがある。命あるものよ、心せよ」(2節)。ドキッと心に刺さる言葉である。中世の修道士たちは毎日互いに「メメント・モリ(死を覚えよ)」と挨拶を交わした。人の死を見つめる中に神の深い知恵と呼びかけが聞こえてくる。十字架の死からキリストを起こされた神の圧倒的な恵みを心に刻んで。</p>
<p>17日 (水) コヘレト 8章</p>	<p>「人は霊を支配できない。霊を押しとどめることはできない。死の日を支配することもできない」(8節)。「年を取った者がどうして新たに生まれるのか」と問うたニコデモに主イエスは答えた。「風は思いのままに吹く。あなたはそれがどこから来て、どこに行くのかを知らない」。人の罪を覆い、新たに生かす神の恵みは自由自在。人の思いをはるかに超えて大きい。</p>

聖書日課 『からし種』 2021.2.14-2.21

<p>18日 (木) コヘレト 9章</p>	<p>「何によらず手をつけたことは熱心にするがよい。いつかは行かなければならないあの陰府(よみ)には／仕事も企ても、知恵も知識も、もうないのだ」(10節)。主が今日一人ひとりに与えたもう「仕事」がある。主に仕え、人に仕える働き。主は「仕事」と一緒に、それを担う「力」と「助け」を備えたもう。自分の力ではなく、主からいただく力をもって大切に取組もう。</p>
<p>19日 (金) コヘレト 10章</p>	<p>「愚者は口数が多い。未来のことはだれにも分からない。死後どうなるのか、誰が教えてくれよう」(14節)。わたしの口は今日何を語るのか。この世界には分からないことがあふれているけれど、主イエスが生涯を通して私たちに確かに伝えてくださった神の愛。その確かな愛に目を注ぎながら、分からないことは神に委ね、主イエスに従う信仰をもって歩みたい。</p>
<p>20日 (土) コヘレト 11章</p>	<p>「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってから、それを見出すだろう」(1節)、「朝、種を蒔け、夜にも手を休めるな。実を結ぶのはあれかこれか、それとも両方なのか、分からないのだから」(6節)。主が今日、各々に託された「パン」と「種」がある。「何もない」とつぶやきがちだけれど、主が確かにわたしの手に託してくださっている恵みがある。</p>
<p>21日 (日) コヘレト 12章</p>	<p>「我が子よ、心せよ。書物はいくら記してもキリがない。学びすぎれば、体が疲れる。すべてに耳を傾けて得た結論。『神を畏れ、その戒めを守れ。』これこそ人間のすべて」(12-13節)。この地上の出来事を理解したとしても、それは空しいだけで、すべてを知ったうえで一番大切だったのは、「神を畏れ、その戒めを守る」ことだと聖書に記されている。</p>